



研究室訪問

「万学の女王」の研究者を気取るより、  
「オッサンホンマに哲学者」と言われるほうがずっといい

## 哲学を教えるドイツ語教師？

約6年のフランクフルト留学を通じて、ドイツで学んだ哲学の発想が身に染みついています。自己認識では私は「哲学を関心の対象とするドイツ学者」です。実際、言語社会研究科ではドイツ系の現代思想を担当していますが、学部ではドイツ語を教えています。

哲学というと難解で奥が深い——多くの人がそう感じているのは承知しています。しかし、その内実はかなり割りきして考える必要があると私自身は思っています。例えば、哲学者にどんな能力が必要なのかと考えてみます。「これ!」というものが思い浮かびません。そう言うと、「論理的思考が重要では?」という声が挙がります。確かに論理的に物事を考えることは不可欠ですが、それだけでは良いアウトプットは望めません。自分の経験を深く受け止め、「人の幸福とは?」とか、「生きる意味は?」といった、論理だけでは追求しきれない問題にもアプローチしなければならないからです。

では、なぜ私に哲学が教えられるのでしょうか。大学入学以来、ドイツ語で哲学書を読むトレーニングを受けてきたからでしょう。その中で、ドイツ語の文章を読む能力をある程度身につけ、哲学的テキストの言葉遣いに慣れることができたからです。そんなわけで、私の場合、「ドイツ語を拠り所にして哲学と(結構楽しく)格闘している」と言うのが、妥当なところでしょう。

## 紙と鉛筆だけでできる哲学

加藤尚武先生の最終講義でのこと。お嬢さんがこんなジョークを紹介されました

「数学者はよるしいですねと言われます。紙と鉛筆、消しゴムだけあればいいのですから、

この「思想のノート」と筆記具、独和大事典を手にカフェで本を読む。本の言葉を誘い水に思い浮かんだことを書きとめるため、ノートは必需品だ。千々に乱れた思考をメモするには4色ぐらいのボールペンが欠かせない。

と。でも、哲学者のほうがもっとよらしい。消しゴムもありません。」

哲学者には、それぞれが勝手なことを言っているだけという印象があるわけです。実際、プラトンの哲学、ショーペンハウアーの哲学というように、一人一人にオリジナリティが認められています。数学では「〇〇の数学」などとは決して言わないでしょうから、哲学の特殊性がわかるというものです。

かつて哲学は、「万学の女王」としてすべての学問の上に君臨するものと見なされていましたが、とりわけ17世紀頃からは自然科学の発展を無視することはできず、哲学的真理の探究にも消しゴムが必要になってきているのかもしれませんが……。

こんなジョークができるのも、哲学が、多くの人が関心を持つ問題を扱っているからです。「正義とは何か?」「時間は本当に存在するのか?」といった、必ずしも専門家でなくともアプローチできるし、せずにはいられないテーマを扱います。これが数学だと、その理論が専門家にしかわからず自分にはちんぷんかんぷんでも、全く腹が立ちません。ところが哲学だと、どうしても気になる話題であるだけに、わからないとしゃくに障るのです。

先ほど、哲学の内実は難しいだけのものではないと言いました。では、なぜ哲学書が難しいのでしょうか。一つには、正確に語るうとするからです。言葉だけで正確に記そうとすると、どうしても話が細かく回りくどくなります。そのうえ、自分の特殊な経験をもとに書き表していることが多いため、共感しづらくなる面もあります。さらに、翻訳にも問題があるように思われます。ドイツ語で哲学書を読むと非常に明晰でわかりやすいことにしばしば驚かされます。ところが翻訳の過程で、難解な用語や表現が使われるようになり、それがいつの間にか日本における哲学書の基本的な文体を形作ってしまったのでしょう。

もっとも、哲学者の中には「自分たちは深淵で難解なことをやっている」というポーズを取りたがる人もいますから、哲学者自身にも責任があることは否めません。

こうして、哲学はちょっと近づきたい存在になっています。そこで、授業では極力、この近寄りたがたい印象を壊そうとしています。「このオッサンが、ホンマに哲学やっとなんか?」と思われるようなノリで授業をやり、学生諸君を(ソクラテスのように)哲学に誘惑したいとたくらんでいます。

## 入力-出力を身をもって示す

前任校の高崎経済大学では当初、「僕のゼミには来ないほうがいいよ。就職にプラスにならないから」と言っていました。ところが、就職委員になって企業の人事部の担当者と話してみると、哲学に興味があるという人が少なくありません。自分の哲学を披露してくれる人までいました。人事の人が期待しているのは、自分の考えをプレゼンテーションできる能力やコミュニケーション能力です。哲学を学ぶことはハンディにはなりません。

ただし、私は哲学を18歳から勉強を始めて一生続けるようなタイプの学問とは思っていません。何らかの切実な理由があって途中から哲学に転じることは、そう珍しいことではありませんし、実際に途中参入して大成した哲学者は数多くいます。

教師として私にできるのは、自分が思想関係のテキストをどう読んでいるかを具体的に示すことです。一語一語にこだわりながら、解説し解釈するとはどういう作業なのかを実演していきます。さらに、自分が読んだり考えたりしたことを、どう表現し出力していくかを示します。要するに、入力-出力をどうやっているのかを実践を通して示すのです。

人の幸福や人生の意味といった深刻なテーマに対して哲学者は偉そうなことを言っていますが、その割にはあまり説得力がないというのが実情でしょう。それを自覚していることもあって、哲学の歴史は反省の歴史です。カントが『純粋理性批判』と言う場合でも、自分たちに発言する能力・資格があるのか、と自己批判しているのです。

哲学には、ほかの科学のような意味での新発見はほとんどありません。常に自分たちが行ってきた作業の反省を行っているようなものです。こうしたイジイジと辛気くさいことをやっているところが私は好きです。

私自身は、キルケゴールとフランクフルト学派の研究を長らくやっています。学問の進歩に貢献するというより、自分自身と何とか折り合いをつけようと悪戦苦闘してきたというのが実態です。私にも消しゴムはいらないようです。(談)

言語社会研究科教授  
藤野 寛  
Hiroshi Fujino

京都大学文学部、同大学院文学研究科で哲学・倫理学を学んだ後、ドイツ、フランクフルト大学に留学(1988-1994年)。キルケゴールに関する論文で学位(哲学博士)取得。1997年-2006年、高崎経済大学経済学部にて勤務。2006年4月に一橋大学大学院言語社会研究科に移り、倫理思想論など、学部で初級ドイツ語・各国思想論(ドイツ)などを担当。著書:『アドルフ・ホルクハイマーの問題圏』(勁草書房)、『アウシュヴィッツ以後、詩を書くことだけが野蛮なのか』(平凡社)など。

